西遊
庚申通夜譚
初編上
泉龍亭是正記
初編中
櫻齋房種画
初編下
榮光堂梓

西遊庚申通夜譚

泉龍亭是正記

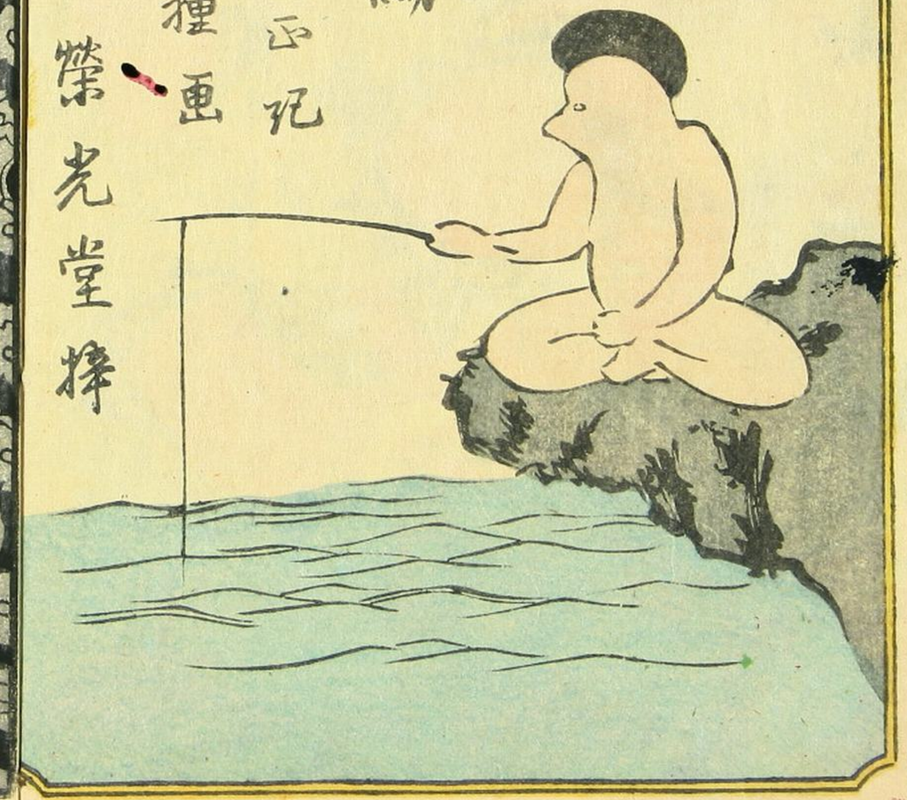
初編上

A491
1

西遊庚申通夜譚

初編

泉龍亭是正記
按齋房種画
榮光堂梓



夫通俗西遊記の大筆たるは普く世の人は知る處なり片々の金繡一部の妙契實に一大奇書と謂ふ可し然るども其意深遠にして童蒙の輩は能く解し得可きにあらず爰に泉龍亭の主人之を歎惜して其文を張縮するに倭假名を以てして庚申艶譚と号く是我自餘の小冊子に比する時は婦幼の為に益ある事豈たゞ百倍而已なら舞耶

明治十三年辰ノ春

葛飾の隠士菱花

<48-8219>

同三女 憐々
東印度賈氏ゟ長女
眞々

長女
眞々
三藏法師ゟ
徒弟
猪八戒
同二女 愛々

華果山の石猿後に三藏法師が
徒弟齋天大聖孫悟空

庚申艶譚初編

東京　泉竜亭是正著

天地混とんと開くるより萬物ことごとく發生し人を生ず獸を生ず鳥を生じ天地人の三才
史とは往を盤古氏の開闢せし時世界別れて四大部洲となり則ち主國の名城
東勝神洲西牛賀州南贍部洲北俱盧洲と号す東勝神洲の海外に一ツの國ゆ里
を記東國といふ此海中に一ツの山なり華果山と号す山の上に一ツの怪石あり其開闢
以來天地の精氣を持ち仙胎を孕めり一日此石忽ち迸裂して鶏卵のごとくなる石卵を産なるが
化して一ツの石猿となり此猿眼より金色の光りを放ち空りて天に輝きしかば上聖玉
帝天上の宝殿に至りて群臣に命ず千里眼通徹を照し將に見聞ありて報ずなるは東勝
神洲敷東國に石猿なりて眼より金色の光りを放ちけ此猿水を飲ひ穀を食しゆへばこの
光りも能て息ゆへんと奏す玉帝聞しあらひ是怪むにさう老迎寄捨て置ける然ば石猿は
稍生育して裳に拯び泪に漁を弱に縛ひ麻と戯れ年月を送りけるが一日群猿と共
に澎湃の下に拯び居たりしが一ツの猿云ふ茶を出し維持ても此能を溺り中の雅
客を見届ける者あらば拯して我儕の王と為むべしといふ時に石猿をこゝ出で我よく

次へ

つぎ 第一回 天竺の浪のよせぞ清かる 教円東南の
地より 猴王 跡を慕て岸みよう 漁人が家よりもろう 秋
市中より入て人の礼義 云事と学ひ なおもそ神仙
人を学ー八九年の星霜を
もー再び西津海でそう
遂よ西半賀物の梁
もう岸より光りて学
行よ山うく峯嶺で
織よ稀代の偉地あり
猴王以下二十人の猿
史よ生え史分数へ
み泡がひて更差方
すの已年月二星の
の頂の善提祖師と

礼拝ー
ねと学
そそ
ひ
身ね
又又も
よふ一つ
祖師笑
汝経将よ
猴よく
と
猿人
猴王
導ー
恩を
術修

我海ろ有よ学さみて性名を実ねし
とて性よ猿名を悟空ー
この洲中小国
まりて道を学
おんとそ私ろ
古祖師菩提空ハ
師よ学さひ猿
若ーて猿会
是よ不老長生の
乃七十二級地怒星
北の法雲中花行の
法よ得授るー祖師
生え勉平雲の速方
我の代勉斗雲の
法術ふ一時うふ十万
八千里よ飛行学ー

つづき
此悪王を退ぞけぬと集猴悲哀を変て
悟空ハ大ひに怒り渠何國より悪王りやと問を
嘆より猴ども何国の住居か知らね
どもも混世魔王と称し
雲に乗り霧を
ふきかの方
より光来り
ねと悟空安
綾りて怒ち
身を聳えて
雲のうへに雲りて
かの方に光中に混世魔王が
洞中の門外に乗り徐我眷属を
悟
一枝を
拔て口に含み空に
向ひて噴出せば夏ちて云
宵余の小
猴と変じて
我の
魔王
鬼迎
なのどるは我友に来りて何を法
ぞ早く出て戦ひを交へよと罵り
なるを彼魔王是を聞くより
悪さ憤ふり身に金盛
銕甲を着し大の鎧を
手に掘り門外に走
り出水蓋洞の事
何國になるや早く
来つて死を投く
せよと大喝一声
して打てゐを出
悟空その満身外
法を法ひ身内の毛
魔

孫悟空

橘鴻郷編輯
銅版開化正編 全
島田豊三郎編
開化女用文章 全
涂崎延房編輯
近世紀聞 初編ヨリ 十編迄出板 宰相遠々発見
男川俊雄閲 永島孟斉画
夜嵐阿鬼奴花仇夢 五編 大尾
同編輯
義烈回天百首 全
同画
魯文作
金花七變化 二十編マデ 次編 出板 追々出板
市岡正誓 巻首本朝諸規則
漢語用文
伊呂波字引 巻末諸證文例 全
秀賀作
濡衣女鳴神 十編 大尾
國貞画
出板御届明治五年九月廿日
日本橋區米沢町一丁目六番地
編輯 假名垣魯文
日本橋區横山町三丁目二番地
出板人 辻岡文助
交地本錦繪問屋
金松堂

010190516917

初編中

A491
2

廣申通教

初編 中社巻

泉龍亭是正紀

撰齋房種画

栄光畫板

<48-8220>

一行の文字を携つけたり悟空まづ
あまとまりて此様と云
あげ恨らくは此様余り
長くおしと重ひ詞
朱ど絶らざるに
不云故
あるかな此様怒ち
縮こ歩て
悟空が
心に適ひたる手段の様と愛じたり悟空
大きに性に龍王に向ひ手数を問に龍王の云ひ此神
孫族の様は昔し夏の禹王水を治めなひし時海の源流を
定めなひし定本にて伸ち時は二十三天に至り下は十八層地獄に
及ぶ亦縮まる時は僅に一二分斗りの縫針となりて耳の

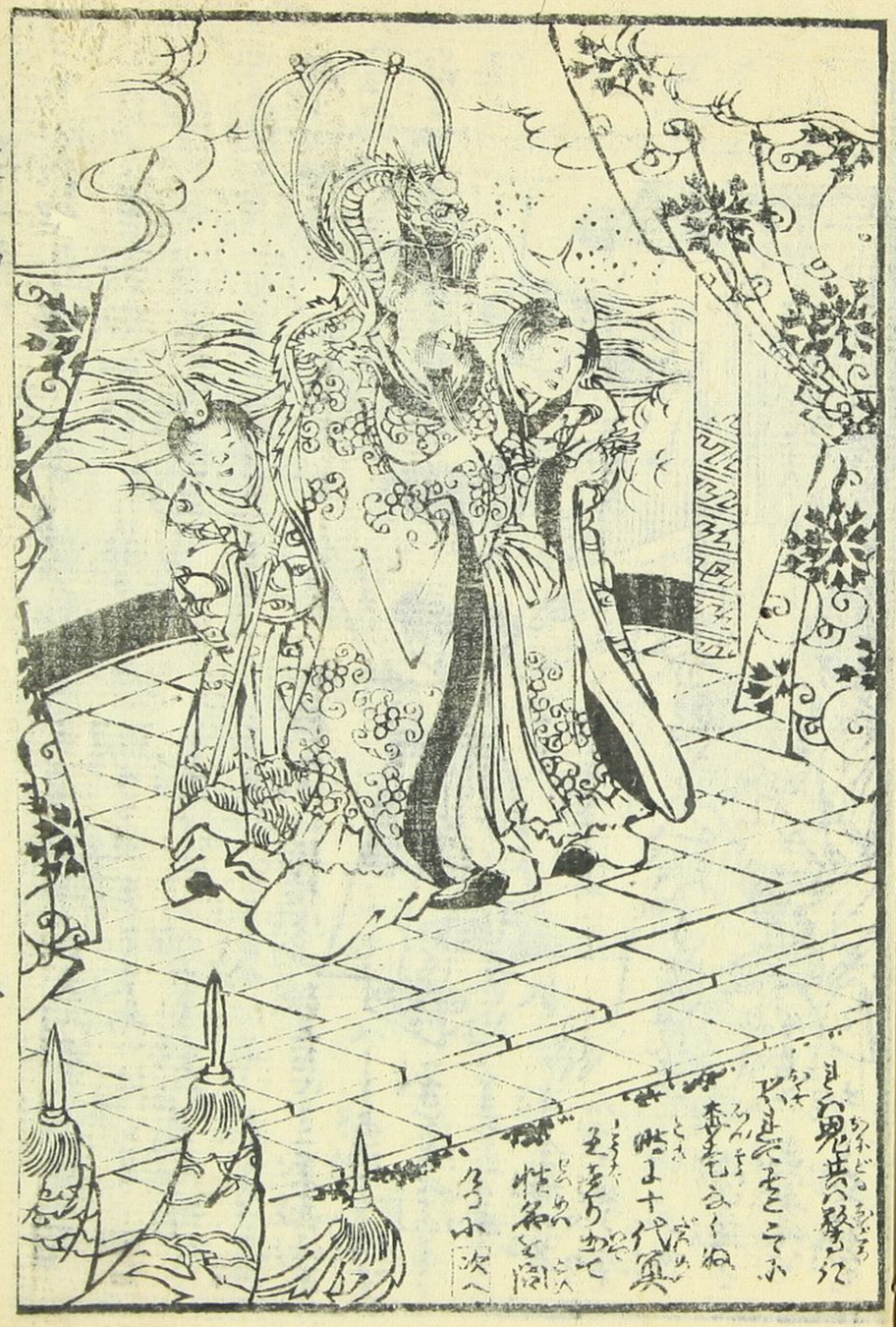
つき

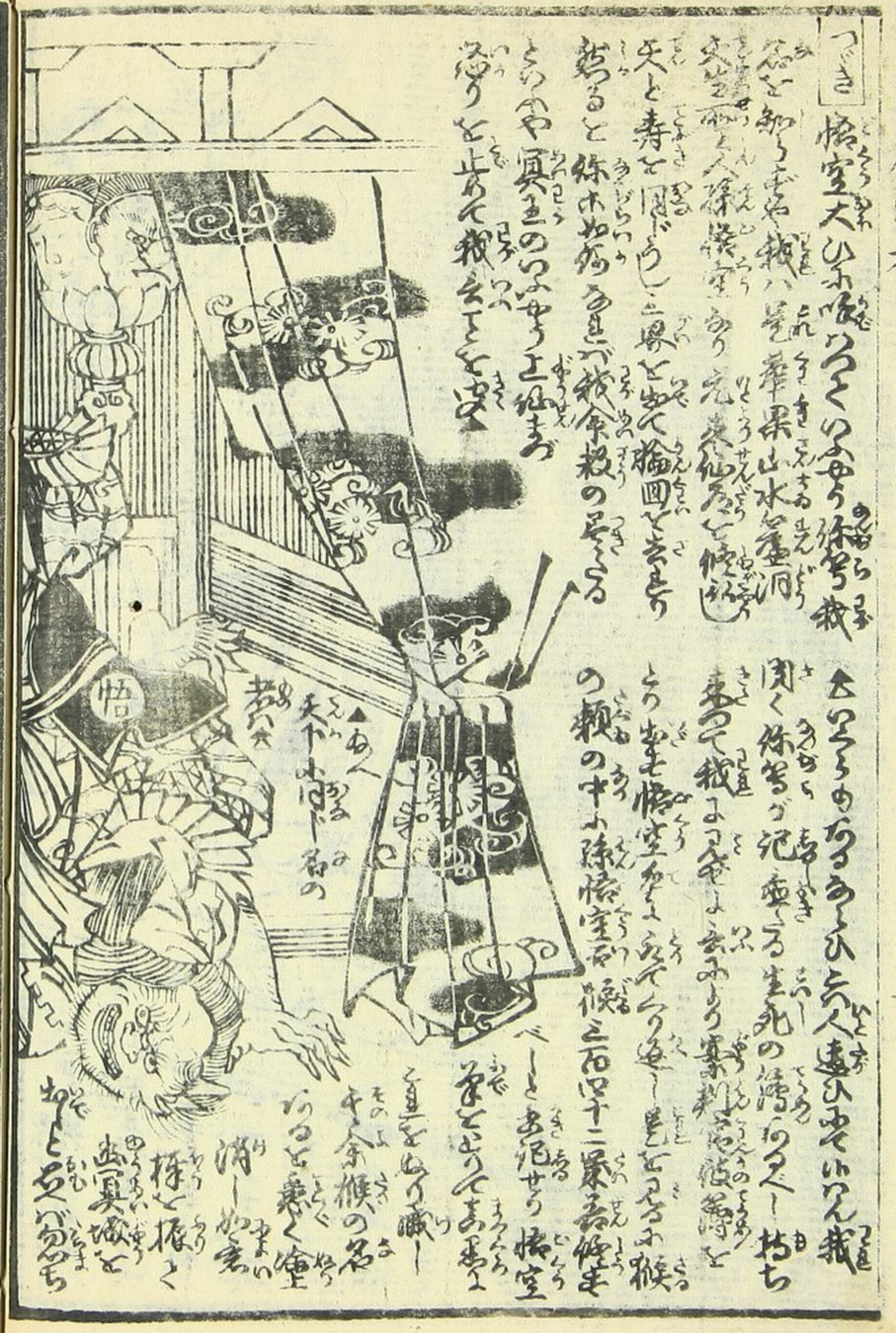
中に隠ト入る事に奇妙の如意
様なりと悟空は見を吹て大ひに悦び
粒甲やあり与へ女と藕絲歩
雲の履鎖子黄金の甲
風翅紫金の冠一頂を取出して与へ
悟空は悦ぶて斜めなるを絶に龍
王に別れを告水簾洞へ廻り
が悟空一夜のことにあん
怪しげなる事出来て
城門の前へ連行ね
悟空既を上て城門を
よく見れば一ツの後
札に幽冥界の

三字を出附
ようこそ幽冥界
と閻王の居城

今婆婆の命数尽
これは此処に
連しとりて
悟空等
あまど大ひに怒り耳
より伴の如意
様をとり出し
只一下付にあ人
を打殺し程鉄様を
振て閻城へ乱れ入

悟





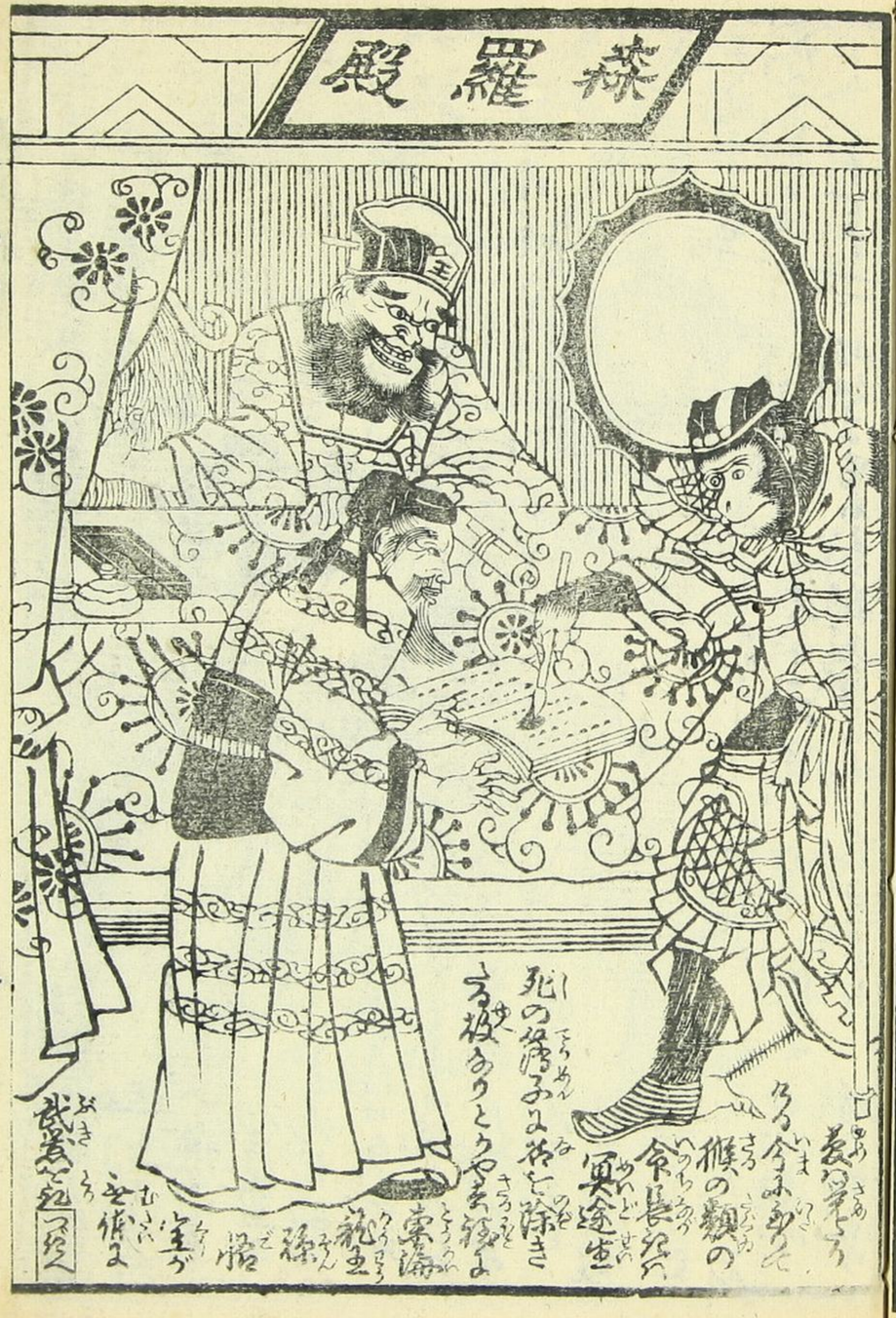
つづき 悟空大いに怒ってくのよう孫等我
なんと知ってもの我八等華果山水簾洞
文書を奪い人孫悟空 ありし元来仙石に修
矢と寿を司ばうし二度と出て輪回をさまり
勧ると孫木如狗 急ぎ我命救のそうる
ものや冥土のつかさう王仏まで
ぬりを止めて我をとどめ

▲あゝ天下に名の
若い木

なると悪く金星
消しかな

悟空 悪く猴の名
千余猴の名
の頼の中より除悟空石候三百四十二果高僧ま
べーと出たり悟空
まとめりてまあまあ
くを止め酒一
杯て振く
必冥城を
もと立ぐち

森羅殿



死の猴みの名を除き
る故ありとうやまよ
武者絵つづく

つぎ

さるを悟空表を祭りて上天を望上奉よ
奏聞ー又冥途よりハ
数通使者来
羅刹悟
空が生まれの
ふるさとを滅さるゝを
怖へその死を免
ーゆへんまでも

刑罰ゆるべーぎょくそ
是ゆへ
悟空を天
宮数ゆる
ごとく
泥馬渡の
猴と投けの人此猴
ま温の猴との区ハ
まぎ猴と猴ゆれども
悟空ハ元来竺
知ら未猴信
猴とも区し
が生行ん
や同家の
猴が如ふり

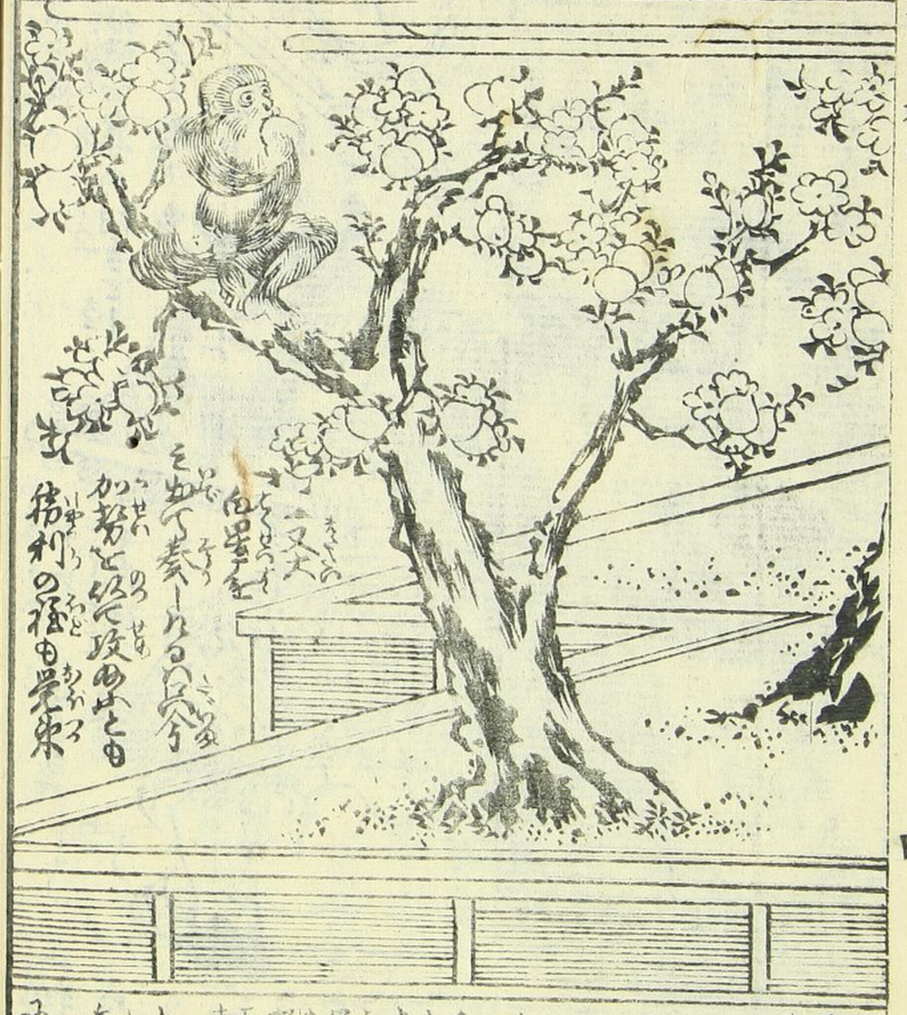
せバ国帝文殊
の仙郷を集めはなを
さんと猴ーゆよ
大白星
そこを出
て

奏ー
ろうハいまゞ
此猴今既ハ
魂と獄の
も懲ゆへ
逃させんろ

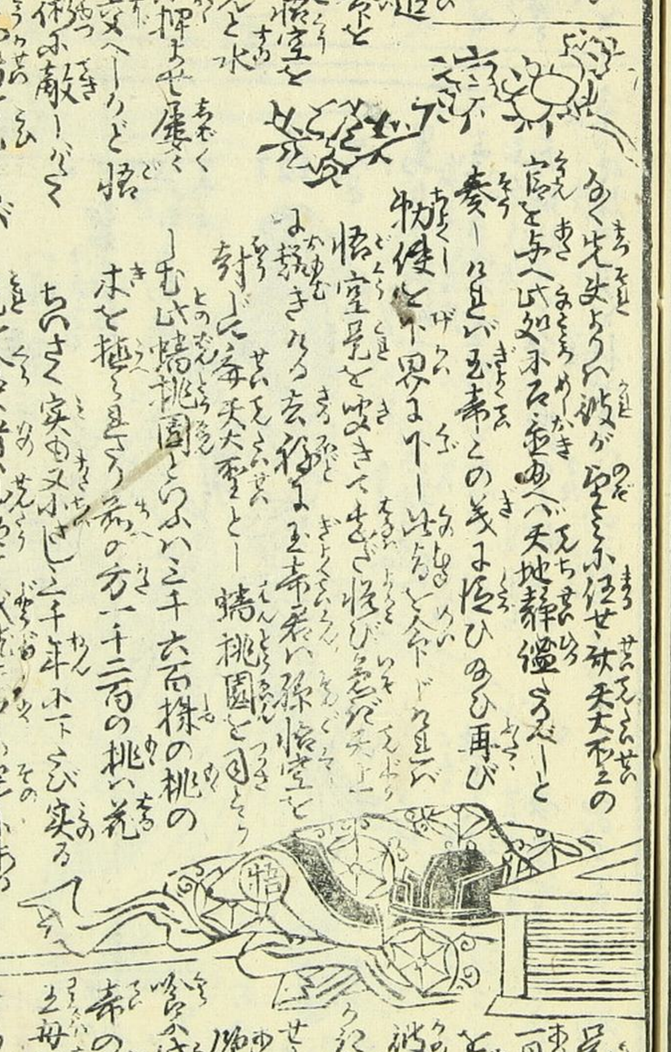
初めて
ーゐ猴と知
り才と
咬んで大
ひゆゆう
忍ち才
とゆ衰ハ
て馬
留とをり出で
華果
火を立
取りを
ゆへの

つき

雑猴と同
衆悟空
を伐ん
とするに
天王あ
孫悟空
鐵を持て
仲裏ふ
を遮り
両方へ
とり別る
洽衆の上



托塔李天王の
子哪吒
太子
孫悟空を
討伐の命を
下し孫悟空
進發せんと水
簾洞を押寄せ
戦ひを交へしが
空が仙術に敵し
托塔天王が勢ひ
よく天空大ひに
戦ひたゝかひ
雌雄を決せん
事を天王と助け
竜
神
初
中



なく先ず六ツの波が
宮を乗へ此如ふ
奏一ツ是ハ玉帝との
牧使を下界より下し
悟空見を突きて
よく突きろ云ふ
ず天大聖と
むし蟠桃園とふ
ホを植ゑさう
ちのさく実の又ホ
見と咎ふ者い
を招んと
仙女の
作

見と咬へ
一回衣裳
と投捨て
彼樹上ホ
熟せ桃と
俺牛べホ
赤の宿
と毋蟠桃会
をの
て天
一千二百株の桃ハ
六千年ホ一下さび
生ホ丸ふ

一千二百
本の花び
ら此ホの
紋あり
のくぎの
実あり九
千年ホ一ト
度熟せ
見と参実
者い天と
寿と同し
ー同月と
年と共
みホ悟空

でき
桃の実を捕せ
ゆふ各々
花籠を
殺さんと
罵りは是は仙女ホ大ひに驚ろ地
に跪きて大聖怒りと息ゆへ只今
王母蟠桃會をなしゆへんと我身ホに
命じて桃の実を捕せゆふ先ホ大聖を殺ね
なれば桃を盗
むや我悪く
うち
悟
又飛と免しゆへと絶れ
ば悟空は喫て王母會を
なして誰人を招ぬゆへぞ仙
女のいはやう后宮會をなし
ゆひて西天の仏
光菩薩
を初めその
八洞の弟
神悉く
集まり
ゆひけと
悟空は此事を喫より我はこれ
夜天大聖の宮より仙術に
ちいて其ゆうさる処は然る

携へ桃
雲に帰りて
夜天大聖に告て雲へ
入るべしとて此処彼処
を尋ねれども悟空は更
に見えの只冠り裳束のこ
樹下に脱捨ろ仙女とも
後方なく木の下に立より
多くの桃を摘ろるに此時
悟空はその丈二尺だかりの
小猴と変じ桃の実
に喰飽てこの蒙漏を
眠り居らしが掴者に目を
覚し織に本相を顕はし耳の
中より金箍棒を
引出し大喜にて汝等何者
かどもいえ人ゆへぬ刻限のかくまつらんと押て
雲に入きふらひね希くはその
小王母を會に我を招ろ
ぞや保ホ
整く此処
に止まれと
言もあれ
悟空は
雲に
まさぐり
宝閣瑤
地に切て
ゆへ

つぎ
さるぐの珍味うづ寄く接並人数十人の官人傍
に並居て海者を獲り居たり
悟空は此ありさまをみて身
の毛二三十本を接て口中に入
ましが忽ち吹出すに多くの
臨臨
虫と変ド弓獲の
官人へ飛てまぶ不思議なり
一人も殘らず
うな

一所例は不実に希後
ど知る者は悟空は仏法は
河者と引よりて飽まで除ひ
確に乗ドて乗り出覺卒天へぞ
ありける此処は古ト一光君の住まふ
処なるが打苦老君法と説あふ仙童号雅改に
出て一人も門をちる者は悟空は打はしと窺ひより仙家
の宝とする九瓣の金丹を葫蘆のうちに納めるのまで
貯へまさ此金丹を喰ひ尽し今は我身の罪科重なる
△うへは玉帝
より免しなふまじて
心を決し忽ち張
此の法をいひて
西天いより乗り出
華果山へこそ戻り
なる此海天上にあれ
玉帝悟空が
罪を犯し
さるを誅し
あれんこそ
十万の天
兵を
発し下界
に下るあふ
手先陣の
大将九曜星
四大天王
つぎ

（つゞき）二十八宿ハ隊を引ちて水簾洞の押寄れバ悟空も又衆弟と仙魔鬼王ハ少しも怖れず七十二洞の妖王を初め数万の猴猻を引卒して陣を対しあたりを叫んで戦ひけるが天兵の強さに妖魔猴猻ハみんな散乱す

◀真君忽ち陣中より数名の番を放ち犬を追ひて猴を追ふるに猴ども八方へ散り驚きて四方へ逃去る 悟空ハ是を見て

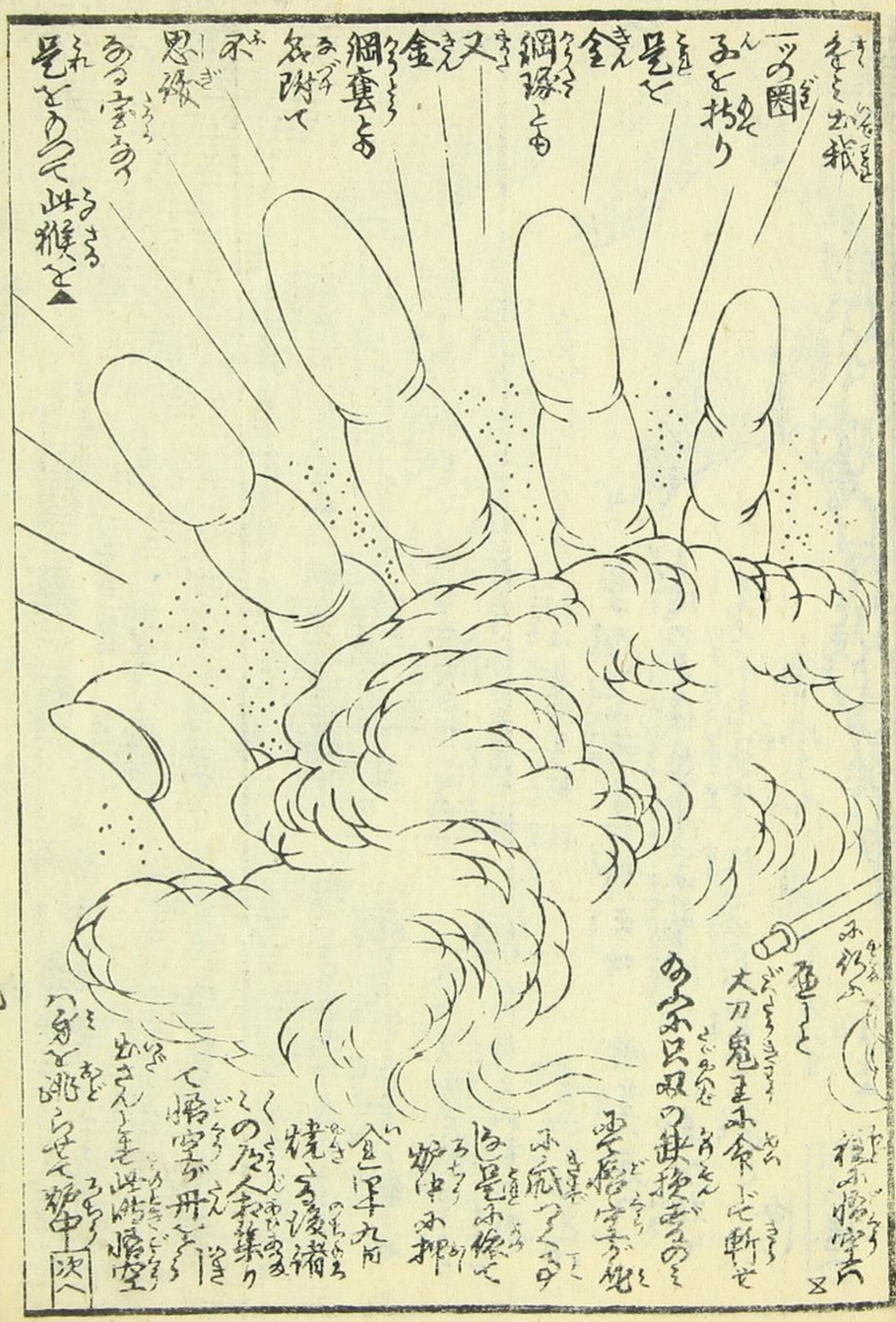
○悟空の中へ飛込むと変じて雀となり梢に止まるを真君又鷹と変じ落さんとせし時雀ハ水に入りて又

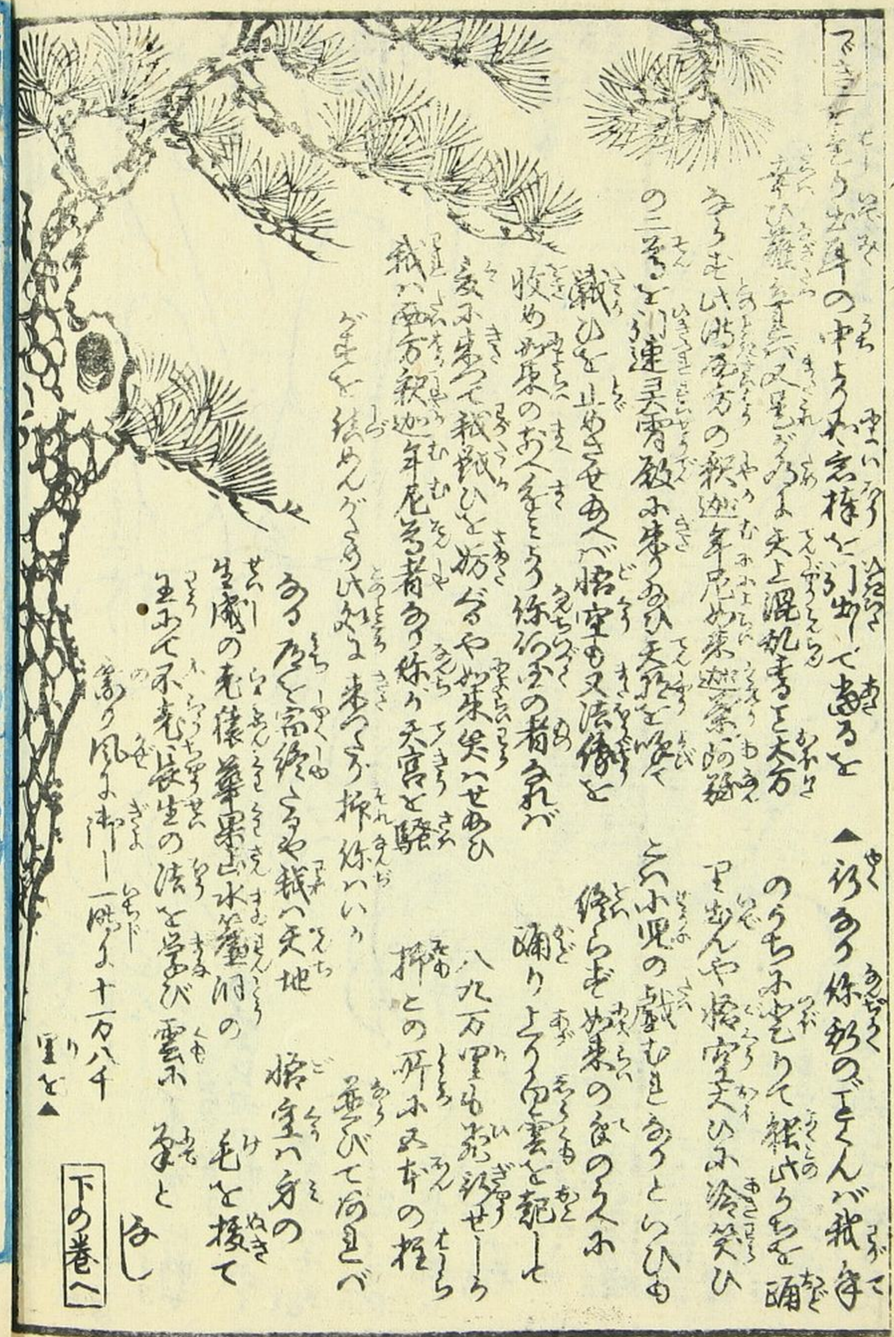
て水簾洞へ逃帰るを悟空ハ是を見てもせず先に見て一を追ひ下し把との身の毛を抜て百千の悟空と変じ一かく鉄棒を打ふり天兵の天神と据へ十方の雲を引き遁く四方の帝の命を受て三更の後一会の間衆人も及ばず付てかつ皇二郎君も戦へども更に勝負の見えざれバ

東方より李天王に水簾洞に逃去る悟空を見て如意棒を変じて針と

又鷹となりて真君忽ち鶴と変ずる悟空蛇と変ずれバ真君又鶴と変じ

（ことごとく次へ）





福岡郷編輯
銅版開化玉編 全
島田豊三郎編
開化女用文章 全

涂崎延房編輯
近世紀聞 初編ヨリ 十編迄出板 以下追々発兌
鮮齋永濯画
芳川俊雄閲 水島孟斉画
夜嵐阿鬼奴花仇夢 五編 大尾
岡本勘造作

同 編輯
義烈回天百首 全
同 出
曹文作
金花七變化 二十編アラ 次編 出板 追々出板
國貞画

市岡正著 巻首本朝諸規則
漢語用文 伊呂波字引 巻末諸證文例 全
秀賀作
濡衣女鳴神 一編 大尾
國貞画

出板御届明治十三年五月廿五日
日本橋區米沢町二丁目六番地
編輯 假名垣魯文
日本橋區横山町三丁目二番地
出板人 辻岡文助

文地本錦繪問屋 金松堂

010190516925

櫻齋房種画
榮光堂梓
初編下

A491
3

庚申

通夜

初垂ん

下の書

泉鏡ゟ

是正紀

按ゟ

序 桂画

<48-8221>

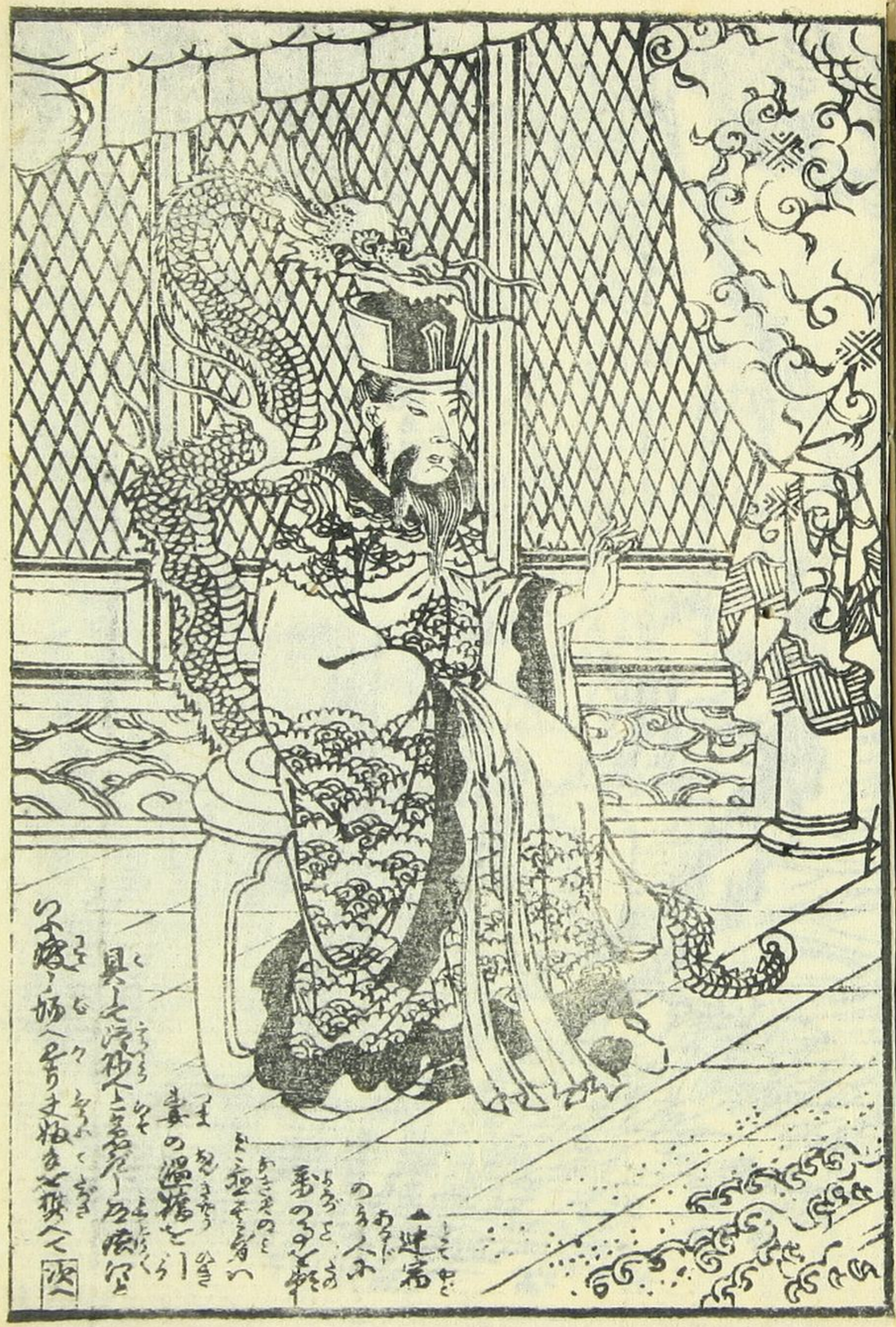
中の巻か

中の桂に奇天大聖到此一遊寸と書紀し去て書を
飛て如来の手に成り我已に遠き事に知り又本の桂に紀を
当年今に現に庚申しといひしを仰せ如来は大ひに罵り給ひ
係猴の絶ら絶ず修し給ふや先より我業の中を
のゝ往来して頼て一歩も踊り給ふ係が又本の
桂と見しは其則ち我指なり頼ハしくよく
見よと仰せにより悟空はあやしを如来
の御手をよく見るに豈計らんや我業の
中の指に書附ける故に悟空
驚れ急に逐んとしたりしを
如来は忽ち

▲女を久して女中に引揺げ西
天門より出ひ又指を変ぶて又切
中なし悟空を山の下にかし入れ
唵嘛呢叭嗹哞の六字を金書
し方札を山の頂
きにあなひ

「ふき」土地神祇不作悪星を払ひ福
せしめ帆鳴八段九重雪降雪雹
鳴八雨汁を洗ひ清めて人の
救ひ助けを待ち其光陰の
流るゝ事矢の如し
余年を経たり一時
も栄西天の雲まち
ふ事也法縁縁の
と等と南膝前

神功皇后
征伐の
絵図
蒙古襲来の
時の絵図
二つの案絵と
もに集古
ありて二義の
絵也ぐさき人と
雷めの差
違んで全集一
第二悪考とも迷
ひ所分備若
ふ
蒙古又襲来城
川奏漢ろい方歴代
教ふて城郭盤虎城
上部の
鬼鏡十二年也相親徴が
蒙古ふ天下ふ
攻ふ
湯秋の
人ふ
蒙古襲来城ふ
攻ふ
教伐
せし



「さき」新六授ひが酒一ばい
劉法妻豹の二人温泉が美
またどうぞ忽ち悪ふざけ
光秀を打殺し屍を水
中へ沈め我れ温泉へ
浸りて
楽しむ心の
彼女妻と
称し温泉へ浸き恨を
洗ひ去りて又今年更の歌を
謡ふ
▲

▲劉法水死ひぬ去
程不浜
ねの川津

▲巡海使よりの飛
官の屍光秀が屍を
さらし飛ぶ法取り初のごと」と披露
これば就主の屍を移さんとて
人ゆう盖し仇敵は枚重なるや此命を救ひ生つ日の
恩を報せばやと頓て考へ魂魄を求めて
ぬれば魂魄妻へて云ふ
ふ避まじ初へ
報ん妻と
よとの人就主
ねる金さの
まづ

▲飛ぶ
坂本着へ
三

▲魂を入
妻に報せ
▲就主
消へ
止まう
不光秀
温泉
就主
さ月月

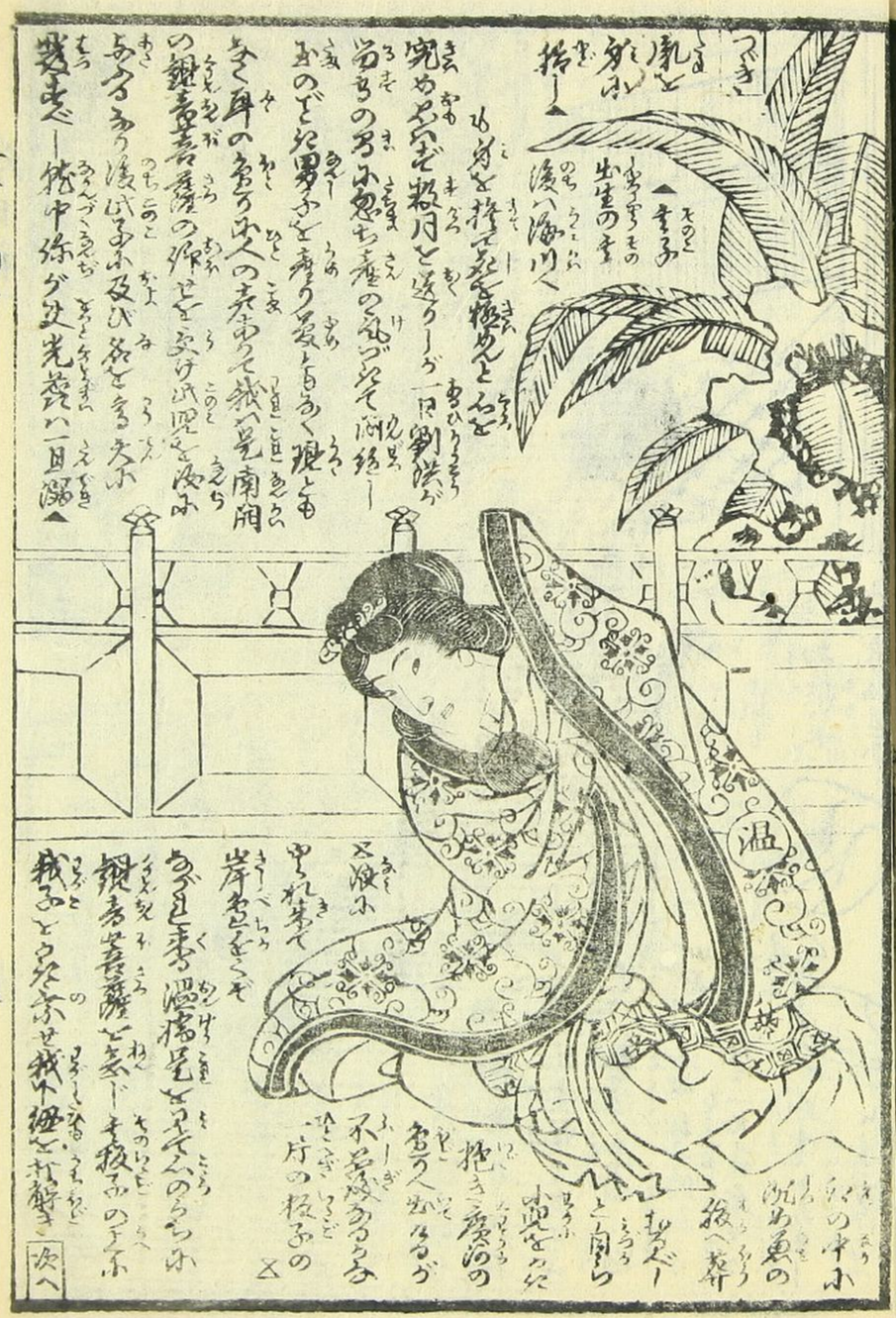
▲乱まるとの父を殺したが報ひ来ん事を恐れ
ろて再び主殺調伏し仇を報ん為

ハテ悩ましい
浪うき
然からみ
賊共うー

家来共かけ出でよ
とく早く救さん

とまだ〳〵温指さゑぎ
ふまじ宥めすの
命を助けんと
ろ云ひ俊ど
絶対更み
髪を切る
今迄命ながく
寿失の恐れを

さらばかくまで



つゞき
乱を
殺し
指ー

▲まるの
出生の事
後へ廻りて

温

ハテ
究めやうぞ報月と遂ろーう一日劇法が
当ちの男ふ恩ち種のゑゞ
おのど
ふまじ男ふを
なく現とも
なく身の為ろ人の為めて我が兄南朋
の継母善善善の事を
ある多の浪ばふ及び名を
我ふ
とろ云ふ
岸ふ

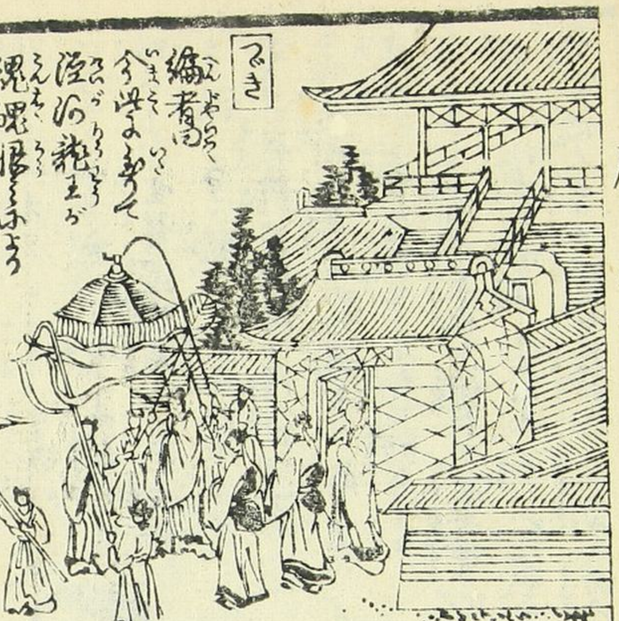
温指先
ろの中ふ
流れ来る
抱き
不思議
片の報ふ

▲次へ

つぎ

つぎ
さべしと不知し
みへば群居自ら以称
の軍兵を引率
し江狩
先年光
太

木
観



つゞき

編者曰
今此の卷
泥洹の龍王が
魂魄歸ふ
安宅皇帝と
垂跡觀音と
地獄變相の
如是とも

陛下仰門と
獨步及まで
南上なつたー去

一陽杖を衒んと
ろめん安宅ま人の
純絲をみて繫潔
陽杖とえふふ勢く
と先りかゞやく給ま
身度の龍ふあつこと
よつて求めて垂跡ふ
よへんとぶーそその
僕へと同ひめふふ
繫潔の僕ふ千ま
ありぬ且ども

陽杖とさげ
鑛壽菩薩のす
相となつたー人ふ又
ふ又も淡掘をとつて
ん沒ふ後ひ
石雲ふ乘じて西
天へ還りま人びと宗
とえんめ文武百皮
僚俗男女大地ふ
平伏南ー禮世尊
菩薩と唱ふる声

ふふう佛果ーて安ふ
除ぬぬ一緒統長の貴魂
十二年九月二日安宅皇
帝いぬ代永久のため日本
此生ちまかて一十二万佛
ふ人の僕と係ふめ絶滅鬼の
大會をとうふふ為ふ先の
日蘭開をふめふ魂香菩
薩ふ去牒法師う乃至
ふるーと宣ひて如來ふ
緣り綿細のか衣海水九張
の湯女と撰へて未又と普よ
疫癘の絲ふ此ー長安の
榮華門へふう伴の繁濃と▲

只ふ宗の法めふと知ーて大宗の
法とらまさ初ーまま今天竺國大雷
音寺我仏加来の伴ふ二菩薩の
ま經あつ乃至則ち大宗の仏法
みて礼生滅仏のま法ふう
陛下德行の絲み給ふく
大會をとうふふ為ふ先の
日蘭開をふめふ魂香菩
薩ふ去牒法師う乃至
ふるーと宣ひて如來ふ
緣り綿細のか衣海水九張
の湯女と撰へて未又と普よ
疫癘の絲ふ此ー長安の
榮華門へふう伴の繁濃と▲

菩薩のま心ふと宣き
ふふふ則ち今の世ふ
佛つる是あう魂香の
重い是ふうーそ叡ふ安宅
皇帝いかくる菩薩七ー
ふよへ一刻も平くふ德
の絲ふ給ー彼天ふとえ
帶ふーめ雲くふ香ふ
絲ふ志ーと云ひるふ
雲菩薩ー安ふ絲ふ
ふうとんぐふ私いくへ一命
と捨西天の幹むるふ絲七
ふう恭ふ志ーと奏ふ
忽ち金色の光りと放ち天

つぎ

さらぬ二人の従者と白馬一疋を編ふ皇帝の妖人と共に関の外まで送りあふ角ろう孟を編ひ別辺の精を尋ー且三蔵の真経をとり返る様なるとバ今より三蔵と号くべーと仰せなるとバ玄奘法師右恩の源を尋ね長渡止め

△其宗皇帝に辞例しなり元人に別辺を告げ西方さして出ゆるる蓋し玄奘のこと義天竺へなりなく唐の人

△親雅孫悟空が徒弟となりて名き

を救ひしこと猪八戒が清秀は次の編に譲りしかば蔵元のその目を詰めひて求めを新ふめも

泉龍亭是正記

櫻齋房種重

銅版開化王編 全

開化女用文章 全

近世紀聞 初編ヨリ 十編迄出板 芳川後雄閲 水島孟府画 夜嵐阿鬼奴花仇夢 五編 大尾

義烈回天百首 全

金花七變化 二十一編アア 出板 次編 追々出板

漢語用文 伊呂波字引 巻首本朝諸規則 巻末諸證文例 全

濡衣女鳴神 一編 大尾

文地本錦繪問屋 出板御届明治十五年五月廿五日 日本橋區米沢町一丁目六番地 編輯 假名垣魯文 日本橋區横山町三丁目二番地 金松堂 出板人 辻岡文助

010190516933

西遊庚申通夜譚

初編

泉龍亭是正記

櫻齋房種画

榮光堂梓